

八千両異変

野村胡堂

一

「親分」

ガラッ八の八五郎が、泳ぐように飛込んで来たのは、江戸中の桜が一ぺんに咲き揃ったような、生暖かくも麗らかなある日の朝のことでした。

「なんだ八、大層あわてているじゃないか」

銭形平次は朝飯の箸をおくと、大して驚く様子もなく、煙管をきせる取上げて、粉煙草をせせります。

「落ついて居ちやいけませんよ。釜屋でまた殺しがあつたんで」

「釜屋？」

「北新堀の釜屋、——ツイ十日ばかり前に主人の半兵衛が鉄砲で撃たれて死んだ——」

「誰が殺されたんだ」

平次もさすがに愕然がくぜんとしました。抜け荷の鉄砲を百挺、三千両でさる大名に売り込もうとした釜屋半兵衛が、怨うらみのある女中に殺され、鉄砲百挺は平次の働きで公儀に没収ぼつしゅうされたのは、ツイこの間のことです。

「番頭の伊八が、離屋はなれで金の番をしていてやられたんで、奪られた金はざっと八千両」

「釜屋は闕所けつしよになる筈じゃなかったのか」

「それが、明日役人に引渡すという前の晩だ。際どいことをするじゃありませんか」

ガラッ八が舌を巻くのも無理のないことでした。抜け荷（密輸入）を扱った釜屋は、主人の葬とむらいが済む間もなく、跡取の初太郎は番頭伊八とともにお奉行所に呼び出され、通三丁目の店と北新堀の住家は言うまでもなく、おびただし家財を没収の上、江戸から追放という峻烈しゅんれつ極まる言い渡しを受け、明日は役人が乗込んで来て、竈かまどの下のの灰までも引渡すことになっているのでした。

その前の晩、町役人の監視かんしの下にひと晩だけ現金の番人をしていた番頭の伊八が、因縁いんねん付きの離屋はなれで虫のように殺され、睨めっこをしていた筈の八千両の小判が、宵から暁方までの間に、煙の如く消え失せたのでは放っておけません。

「そいつは容易ならぬことだ、すぐ行くでしょう」

平次は自分もいくらかの掛り合いがあるせいか、いつになく気軽に御輿みこしをあげました。

北新堀の釜屋へ行くと、町役人が詰めかけた上、土地の御用聞が二三人、霊岸島の滝五郎の采配さいはいで、裏表を嚴重に固め、出入りを一々検査して、水も漏もらさぬ大警戒です。

「滝五郎親分、大変なことになったね」

「銭形の、今度という今度はおどろいたよ。今日は御上に引上げる筈の金が八千両だ、番頭を殺して持出すにしても、一人や二人の業わざじゃねえ、——まア見てくれ」

滝五郎はこの辺を縄張りおびにしている自分の責任の重大さに脅えて、銭形平次の助勢を心から頼母たのもしく思った様子です。

二人は八五郎や二三人の下っ引といっしょに、裏の離屋の方に廻りました。抜け荷を扱って暴富を誇ほこった釜屋の構えは、嚴重の上にも嚴重を極めて、忍び返しを打った凄まじい塀の中には、

城郭じょうかくのような家造りが物々しくも軒を連ねております。

「潜戸くぐりどや木戸は開いていなかったのかな」

平次は誰にともなく訊きました。

「へエ、皆んな内から締っておりまして。一々門かぬきや輪鍵がかけて

——」

背後で応えたのは、三十前後の狐のような感じの男——それは通三丁目の釜屋の店から、主人の死後北新堀の住居の方へ手伝に来ている手代の与之助と後で判りました。

「戸締りは誰がするんだ」

「亡なくなった番頭の伊八さんで、——尤もっとも朝戸を開けて、庭を見廻るのは小僧の乙松おとまつの仕事で、へエ——」

「その時は何んの変ったこともなかったのか」

「へエ——」

手代の与之助の答えを後ろに聞いて、平次と滝五郎は離屋の外に立っておりまして。

「足跡はないぜ、何しろこの天気つづきだ」

沓脱くつぬぎのあたりを見廻している平次に、滝五郎は先輩せんばいらしく声を

掛けます。

「雨戸は？」

「輪鍵は掛けてなかったが、内から締っていたそうだ。小僧の乙松が外から声を掛けても返事がないので、番頭を呼んで押し倒して入ったという。——その通りだね」

滝五郎は後ろにいる与之助を顧かえりみました。

「へエ——、それに相違御座いませぬ。陽は高くなったし、中からは返事がなし、先の事で懲こりておりますから、乙松と二人がかり

で、中程の雨戸を一枚押し倒して入りましたが、あの通り滅茶滅茶で——」

与之助の指した方を見ると、なるほど一枚の雨戸は框が折れ、板が剥れたまま、縁側に立てかけてあります。

「それから」

平次は先を促しました。

「飛込んで見ると、取っ付きの六畳は血の海で、番頭さんが——」

「雨戸はどんな工合に締っていたんだ」

「下の棧さんだけおりて居りました」

「確かにその通りか」

「何しろあわてていたもので、へエ。尤も輪鍵もつとは確かに掛ってありません」

それを聴きながら、平次は一步六畳へ入っております。

二

「フーム、これはひどい」

平次の唸うなったのも無理のないことです。六畳は文字通り血の海で、番頭の伊八は仰のけ様に倒れておりますが、死骸の位置から見ると、八千両の金と睨めえいりっこをして居るところへ、後ろから近寄った曲者が、鋭利なあいくち匕首か何んかで、その喉笛のどぶえを掻き切ったのでしょう。

「刃物は？」

「なかった」

「番頭の死に切るのを待って、死骸の袖で血刀を拭いた様子だ。

落ちついた野郎だな」

平次は伊八の袖に残る細刃の兇器の跡を指しました。

「背後うしろから曲者の近寄るのを知らずに居たのかな、——寝ずの番をするつもりのが、ツイ居眠りをして居たところへ、曲者が忍び込んだのかも知れない」

滝五郎は自分の想像を組み立てました。

「いや、曲者が入ったのは、まだ宵のうちだ、——この通りお茶も吞まずにいるし、よく掃除そうじした煙草盆には、灰殻はいがらも残ってはいない。——曲者は多分伊八のよく知っている人間だろう。後ろから声を掛けながら入って来たから、ツイ油断をして、振向きもせず八千両の小判と睨めっこをしていた。——そこを不意に背後うしろから、ヒ首あいくちを逆手さかてに喉を掻き切り——その上八千両の小判を持って逃げた——」

平次の想像はその上へ確りした足場を組み立てるのです。

「八千両の小判は、裸はだかで三十三貫目あるぜ、一人や二人じゃ持ちきれまい」

滝五郎は小判をその辺に隠してあるに相違ないという見込みで、今朝から縁の下、物の蔭、井戸の中などを、下つ引を督励とくれいして、必死と捜しつづけましたが、陽が高くなってもまだ、小粒一つ見付からなかったのです。

「八千両の小判は、その辺には隠しきれまいよ。ところで、俺は曲者はどうして入って、何うして逃出したか、腑に落ちるまで調べたい。——八、雨戸を閉めて見てくれ」

「へエ」

八五郎は離屋の雨戸を全部閉めて見ました。言うまでもなく、

外から押し倒したという壊れた雨戸は、壊れたままに溝へ入れたのです。

「敷居に血が流れ込んで、棧さんの入る穴にも少し溜ためっているが——」
平次はそんな事を言いながら、一番最後の雨戸をはずして、その棧の様子を調べました。六畳から流れ出した血が、縁側に筋を引いて、敷居に流れ込んだにしても、その量が少なかつたせいか、それとも時が経って血が凝固こりかたまつたためか、棧さんの下は大して汚れてはおらず、少しばかり血が付いているにしても、敷居の穴に棧を密着させる程ではありません。その時、

「変な事を聴いたんだが——」

ガラッ八はそつと平次に囁やきます。

「何が変だ、言ってみろ」

「ゆうべ亥刻よつ少し過ぎ（十時過ぎ）小僧の乙松おとまつが離屋はなれの前で嫁のお袖に逢ったそうですよ。月は良かったし、間違いはないって言うが」

「小僧がそんな事を言ったのか」

「あの小僧はすっかりあつしと仲好しになりましたよ」

ガラッ八の開けっ放しな態度や、その人の好きが若い乙松を信用させたのも無理はありません。

「それが拵こさえ事でなきゃ面白い手掛りだが」

「まだ外にも、いろんな事を言いましたよ。——きのう薄暗くなつてから、若い武家が、店の前を幾度も幾度も通るような恰好で、家の中を覗いたという話や」

「その若い武家は、乙松の知らない人か」

「見たことのない武家だそうで、——若くて好い男で、身みな扮なりも悪

くなかったが五遍へんも六遍も店を覗く様子は変だったそうですよ」
「それから？」

「この家の嫁のお袖は、芳町の芸者上がりで、若旦那の初太郎が身請みうけをして、仮親を立てて家へ入れたが、亡なくなった親旦那は夫の不承知で、ツイこの間まで、出すの引くという騒ぎがあったこと——」

「それから」

平次は促うながしました。順風耳はやみみのガラッ八の鼻が、何やら意味深く蠢うごめくのです。

「ありますよ——番頭の伊八は年甲斐もなく飛んだ道楽者で、若旦那が身請みうけする前は、お袖の客筋で、うるさく付け廻して居たんだって言いますよ」

「——フム」

平次は唸うなりました。いろいろな証拠しんこを築きずき上げて、次第に曲者の外形が纏まとまつてくる様子です。

三

「昨夜ゆうべ、宵のうちの外へ出た筈だが——」

「いえ、夫うちに訊いて下さい。私は御飯が済むと自分の部屋へ引籠こもって、それっきり朝まで一と足も出ません」

お袖は以ての外ほかの頭を振るのです。もう二十一と聞きましたが、もとがもとだけに飛んだ愛嬌もので、何処か人を外らさないところがあり、それに肉体的の健康から来る明るさが、少しばかり下品ではあるが、何にか知ら人をひき付けずに措おかない魅力になっ



©2017 萩 柚月

て発散します。

「小僧の乙松が、おとまつ離屋はなれの前で逢ったというが――」

「そんな事はございません。あの子は嘘つきで出鱈目でたらめですから」
お袖は美しい眉をひそめるのでした。

若夫婦の部屋というのは、母屋おもやから突き出して建てた六畳と四畳半の二間で、少し乱雑な調度のなかにも、若い女の息が通うなま艶めかしさがあり、六畳の窓からは、障子を開けさえすれば、狭い庭も、離屋の出入りもよく見えます。

「番頭の伊八は、芳町にいる時分、お前の客だったと聴いたが――」

「え、嫌な人でしたが――」

お袖はそれっきり言葉を濁しました。

「お前の実の親というのは何をしているんだ」

「——それが判らないんです。私は生れた場所も、親の名も存じません。里親から里親へ渡り歩いて、芳町へ売られた時は、目黒の百姓の娘ということになって居りました」

お袖の明けっ放しな顔も、この時ばかりはさすがに曇りました。
「その百姓の名は？」

「御不動様の近所で、石松と訊^きけばすぐ判ります。——でも石松夫婦のところに養われたのは、十二か十三までほんの一年足らずで」

「その前は？」

「大久保のお勘婆さん。——その前は板橋の駄菓子屋で千之助。——その前は——」

「もう宜い」

銭形平次もこれでは手のつけようがありません。

お袖を宜い加減^{かげん}にして、それから若旦那の初太郎に逢って見ましたが、これは父親の横死から、家の没落、番頭の死、八千両の紛失^{ふんしつ}、恋女房のお袖にふりかかる恐ろしい疑いなどに顛倒して、何を訊いてもしどろもどろです。

「ゆうべお袖は確^{たし}かに外へ出ないと言ったな」

「へエ——、夕方から気分が悪いと言って、この部屋に籠ったきり、一と足も外へは出ません。私が側に付いて介抱したのですから、間違いはございません」

この男ならずいぶん、一晩が二晩でも、女房の介抱をしきることでしよう。

「昨夜はよく寝たか」

「飛んでもない、——この家に寝るのも、今晚限りと思うと、眼が

冴えて眠られるどころの沙汰じゃございません。それにお袖も一晚寝付けなかったようで、——尤も曉方から疲れが出て私もついウトウトしました、眼を覚した時はもう陽は高くなって、お袖は起きておりました」

「きのう店の前を変な武家がウロウロして居たそうだな」

「へエ——、乙松おとまつに言われて、私も覗いて見ましたが、まだ若い立派なお武家で」

「全く知らない顔か」

「へエ——」

あとは乙松や下女のお元や、近所の衆にまで訊ねましたが、何んの得るところもなく、ともかくも平次と八五郎は、近所の滝五郎の家へ一たん引揚げ、あとは土地の御用聞や、滝五郎の子分たちちに任せて、しばらく様子を見ることになりました。

今日を限りの釜屋の退転も、そんな事で愚図愚図ぐずぐずになり、曲者の捕まるまで、あるいは八千両の行方がわかるまで、とにかくにも、釜屋の一家は、そのまま町内預けにする外はなかったのです。

四

「どうしたものだろう、銭形の、俺には少しも見当が付かないが、

——あの嫁を挙げたものだろうか、それとも」

霊岸島れいがんじまの滝五郎も、袋路地に突き当たったような顔をするのです。

「俺にも解らない、——が、曲者は外の者に違いあるまい」

「どこから逃出したんだ」

「それがわからないのだよ。宵のうちに忍び込んでいたに違いない。——多分伊八が顔見知りの者だろう。伊八を殺して、八千両の小判を蟻ありが餌えを運ぶように、庭木戸まで持出し、外にいる仲間の者に渡した。それから離屋の雨戸を閉めて、外へ出た。——」

「雨戸の棧さんが敷居の穴の血にこびり付いてはいなかったぜ。——

棧は穴の中の血の乾いた上へそつと落ちて居た。——それにも裏木戸も、庭口も皆んな内から閉っていたし、塀へいは一丈もある上、忍び返しは恐ろしく嚴重だ。飛越える手掛りも足掛りもない」

滝五郎の反駁はんぱくはことごとくもつとものです。

「離屋の雨戸や、庭口の潜りを締めたのが、今朝になってからだとしたらどうだ」

「誰がそんな事をしたんだ」

「解らない」

「やはりあの嫁が下手人じゃないか」

「そんな事はあるまい。暗くなってから、ほんの一寸でもあの女が外へ出たら、初太郎は大変な騒ぎをするだろう。離屋へ行って番頭を殺して、八千両の金を運び出すうち、あの男は自分だけ一人黙って待っている筈はない」

「暁方からウトウトしたと言ったが——」

「いや、殺しは宵だ、血があんなに固まって、戸の棧さんにさえ付かない程だ。それに夜が明けちゃ、八千両の金を運び出す工夫はない」

「手代の与之助は臭くないか」

「人相は悪いが、それほど大それた人間とも思われぬ。それに夕方から店に坐って、今日引渡す筈もくろくだった目録を作っていたし、

あの目の早い乙松おとまつに隠れて、外へ出る工夫はあるまい」

「すると何ういうことになるのだ」

滝五郎はどうとう投げてしまいました。

「手段は二つしかない。滝五郎親分は、気の毒だが下っ引を五六人か駆り出して、目黒の石松と、大久保のお勘婆アと、板橋の千之助を当って見てはくれまいか」

「？」

「お袖の身許を突き留めたい、いくら里子にやられた娘でも、そんなに渡り歩くのは容易のことじゃない。何んか仔細しさいがあるだろう。板橋の駄菓子屋で判らなければ、それからそれと手繰たぐって行くのだ」

「宜かろう、それ位のことなら明日一日で何んとか埒らちがあくだらう」

滝五郎も今は平次の指図に従うほかはなかったのです。

「八五郎は龍の口の辺をうろ付いて——」

「うろ付くんですか親分」

「不足らしい顔をするなよ。お前の顔を利かせる気じゃブチ壊こわしだ。町方の者と覚さとったら最後、何んにも教えちゃくれまい。それより評定所や下馬先や、大名方のお供の大勢集まるところへ首を突込んで、精いっぱいお前の耳を働かせるんだ」

「へエ——？」

「まだわからないのかな。——近頃どこかの大名屋敷で、江戸家老とか御側用人とか、筋の通った御家来衆で、腹を切ったのがないか、それを聴き出すんだ」

「？」

「百挺の鉄砲を買い損ねて、三千両の大金を棒に振りや、大概の武家は腹を切るよ。五百や一貫費い込んで、尻喰い観音をきめ込むこちとらとはわけが違う」

「なるほどね」

「腹を切った武家があったら、その妻子はどうなったか念入りに訊き出すんだ」

「腹を切らなかつたら何うします」

「百挺の鉄砲は公儀に取上げられてしまった。どう工夫したって二度と戻る氣遣いはない。あれだけやり損ねると、百の九十九までは腹を切る」

「――」

「そうかと言って、唯のお武家じゃ、十日や一と月の間に、三千両の大金は償いきれない」

「なるほどね」

平次の明察の前に、ガラッ八も承服しないわけには行きません。

五

「親分、驚いたの驚かねえの――」

「何を驚くんだ」

翌る日の夕刻、平次の家へ飛込んで来たのは、八五郎の勝誇つた姿でした。

「親分の言った通り、下馬先のあたりを半日うろ付くと――」

「何にか聞き込んだか」

「親分の天眼通に驚いたぜ」

「何をつまらねえ、——腹を切ったのは、何処の家来だ。早くそれを言いな」

「飛驒^{ひだ}高山三万八千石の城主、金森^{なかとのかみ}長門守様の御用人、五百石取の富崎左仲という方が、今からちようど十日前に、お長屋で腹を切って死んでいる」

「それから」

「倅の佐太郎という二十五になるのが、永の御暇^{おいとま}になって、母親といっしょに退転した」

「落ついた先は？」

「それを訊き出すのに骨を折ったぜ。眼と鼻の間、——神田お台所町とは気が付かないでしょう」

「フーム」

「まだあるぜ、親分。今から感心しちや早い」

「何があるんだ」

「その佐太郎が、龍^{たつ}の口^{くち}の金森屋敷を退転してから三日目、——というところちようど昨日のことだ。佐太郎の使と言って、金森家重役に莫大^{ばくだい}の金子を差出した者がある」

「その金はいくらだ」

「そこまでは解らねえが、ともかく莫大だ。莫大というと親分の前だが、五両や三両じゃないでしょう」

「何をつまらねえ」

「踏込^{ふみこ}んで、その佐太郎を縛ったものでしょうか、金森家を浪人すれば、もう遠慮はありませんぜ」

「馬鹿、その富崎左仲という人が、鉄砲の買手ともきまって居らず、その倅の佐太郎が、何んのために何処から出した金を持って

行つたかも知解らないじゃないか、——もう少し様子を見てくれ、俺はちよつと靈岸島れいがんじままで行つて来る」

ガラッ八をもういちどお台所町へやった平次は、ゆっくり夕食を済ませて外へ出ました。

柳原土手は宵から淋しく、花時の人間は向島、飛鳥山あすかやまに集中して、此処ここはあまり人通りありません。

あた新し橋の袖のあたりまで来ると、

「待て待て」

柳の蔭から出た一人の若い武家。

「あつしで——」

振り返る平次へ、

「覚えがあろう」

抜き討にサツと浴びせたのです。それは実に凄手際でしたが、幸い平次にも油断がありません。

「あッ、何をする」

二つ三つ、かわして柳を小楯こだてに取りました。

「平次、覚悟ッ」

なおも追及する刃やいば、それは実に火の出るような激しさですが、平次は巧みたくに逃げて、

「えッ、平次と知つての暗討か。名乗れッ、何処の何奴だ」

「——」

相手はそれに返事もせず、なおも畳みかけて来るのを、あしらい兼ねた平次。思わず懷さぐを搜つて手馴れた四文銭が二三枚、

「えッ、聞きわけのない奴だ」

パツと投つたのが、一つは曲者の拳へ、一つは顎あごへ、

「汝^{おの}れッ、卑怯^{ひきよう}ッ」

「卑怯^{そつち}は其方だ。名乗らなきや眼へ行くぞッ」

三つの銭が飛ぶ前に、バラバラと駈けて来たのはガラッ八の八五郎でした。

「親分、——あつしが来りやもう大丈夫だ。その野郎をフン縛つてしまひましょう」

懐^{ふところ}から白磨きの十手、袂^{たもと}からはくり出す捕縄^{ほじょう}。七つ道具をふり

翳^{かざ}した八五郎は、孫悟空^{そんごくう}のようにおめき叫んで飛かかるのです。

形勢不利と見たか、刃を引いて踵^{きびす}を返す曲者。

「野郎ッ、逃げるかッ」

「止せ止せ、八」

平次の止めるのは耳にもかけず、薰^{くん}ずるような春の夜の朧^{おぼろ}を縫って、曲者も八五郎も飛びました。

六

「銭形の親分、此方から行こうと思つていたよ。見透^{みとお}しの通り、あのお袖という女には、不思議なことが付き纏^{まと}つてゐるぜ——」

霊岸島の滝五郎は、平次を待ち構えての話しです。

「——それは斯^こうだ。お袖の親の素姓も、生国もわからないが、とにかくあの女が子供のとき育てられた家というのを五軒まで調べて見たが、あの通り容貌^{きりよう}よしだし、人にも可愛^たがられる性だが、気味の悪いことがあつて、どうも長くは置けなかつたそうだ。何処^{どこ}からともなく、びっくりする程の金や物を貢^{みつ}いで来るのは宜いが、何んとも素姓の知れない者が、いつでもお袖を見張つていて、

お袖を泣かせたり、ひどい目に逢わせたりする者は、きつと倍增ふくしゅうしの復讐ふくしゅうをされるんだそうだ。だからお袖は可愛いが、長く育てては置けない。自然人手から人手に渡って、十三になる年には、芳町へ売られていたというぜ」

滝五郎の話は奇怪です。

「そんな事だろうと思ったよ。やはりあの女だ」

平次は思いも寄らぬことを言うのです。

「あの女が下手人だというのか」

「そうとでも思わなきゃ、解らない事ばかりだ。——やはりあの女だよ、伊八は後ろから来る人に気を許して殺された——八千両と睨めっこをしている伊八が、夜中後ろから来る人の気はいに平気でいられるのはあの女の外にはない。——仲間の者に八千両の小判を持出させて、内から潜戸くぐりを閉めて置けるのもあの女だ。雨戸は外から締めただけでも、下の棧さんがひとりでおりる」

「初太郎は——お袖は——足も外へ出なかったと言ったぜ」

「亭主が女房を庇かばったんだ。それに気が付かないではないが、俺はあの初太郎という男を見くびり過ぎていたよ。一所懸命になると、あの男でも随分それくらいの細工さいくはするだろう」

「で、親分は？」

「俺は龍の口へ行って訊き出すことがある。お袖の方は頼むぜ。——もつとも今晚はいけない。明日の朝、あまり早くない方が宜い、正面から釜屋へ乗込んで縄を打ち、八丁堀まで引いて行ってくれ。泣いてもわめいても手加減てかげんをしちゃならねエ。あの女は大変な女だ。二つ三つは打っても構わないから、諸人への見せしめ、存分にやってくれ」

「大丈夫かな」

滝五郎には呑み込めない事ばかりですが、若いながら日頃その智恵や手腕に心服する平次の言葉には反きそむきようのない理窟があります。

平次が神田の家へ帰って来ると、ちょうどガラッ八の八五郎も、汗と埃ほこりだらけになって戻って来ました。

「どうした八、たいそう勢い込んでいるじゃないか」

「あの野郎、足の早いには驚きましたよ」

「でも逃げも隠れもせずに、真っすぐにお台所町へ帰ったろう」

「横着おうちやくな野郎じゃありませんか」

「それで宜いのさ。ところで、お前の耳でもう一つ聞出して貰いたいことがあるんだが――」

「何んです、親分」

「富崎佐太郎が、金森家へ返した金がいくらか、確かな事が知りたいんだ。浪人者の工面たくなら多寡たかが知れているが、もし三千両と纏まとっていたら、すぐ飛んで来てくれ。――佐太郎自身で持って行つたか、使の者をやったか、それも聞出すんだ」

「やって見ましよう」

疲れを知らぬ八五郎は、そのまま夜の街へ飛出しました。

八五郎がその報告を持って来たのは翌る日の朝。

「親分、大名屋敷は苦手だぜ。八方から手を入れて、ようやく判つたのはたった今だ。富崎佐太郎の使が金森家用人へ持込んだ金は、確かに小判で三千両だ。長門守様ながとのかみもその話を聞いて、すっかり考え直したって言うぜ。いずれ近い内には帰参ものだろう」

「そうか、それで何も彼も判った。これから先は少しむずかしい

掛合事だが、お前もいっしょに行くか」

「何処までも行きますよ、親分」

八五郎は相変らず疲れを知りません。

×

×

この話はまだまだ長いのですが、残念ながら筆を止めて、ざつと荒筋だけを辿り、思いも寄らぬ下手人を登場させます。

平次がお台所町の富崎佐太郎浪宅を訪ね、——親の敵——といきり立つ佐太郎を撫めて訊くと、金森家へ三千両の小判を返し、佐太郎の父親の罪を贖ったのは、全く佐太郎の知らぬことと判りました。

佐太郎の方でも一時は父親を自殺に導いた銭形平次を怨みましたが、平次は御禁制の鉄砲買込みの企てを妨げたほかには他意がなく、詮索すればわけもなく知れたはずの鉄砲の買主を庇い、自分の手柄をフイにしてまで、金森家の名誉を救ってくれた事を聴いてすっかり気が挫けてしまいをした。

佐太郎は畳に両手を突いて平次へ詫びるのです。父の自害した後、三千両に心引かれて、釜屋の前をウロついたり、昨夕は平次の後をつけて、柳原土手で斬りかけたりしましたが、それが間違った考えであつたと解ると、武士の額を畳に埋めて、何んのだわりもなく岡っ引風情に詫びる佐太郎だったので。

平次が富崎佐太郎をつれて、八丁堀の組屋敷へ行った時、ちょうど霊岸島の滝五郎は、泣き濡るるお袖に縄を打って、おろおろする初太郎を後ろに、最も派手に八丁堀へ乗込んで来た時でした。お袖の濃艶な美しさと、その浅ましく取乱した姿が、たぎり返る釜の中に、紅の花を一輪投り込んだように、物見高い江戸中の噂

の焦点しょうてんになったことは言うまでもありません。

その日の昼過ぎ、囃おとりに誘さそわれた美しい鳥のように、

「釜屋の番頭伊八を殺して、八千両の小判を盗んだのはこの私だ。サア何んとでもしておくれ」

恐ろしい勢いで八丁堀の組屋敷へ駆け込み訴うったえをしたのは、目のさめるような美女——それは一しきり江戸中を騒がせた兇族黒雲の弥十郎の娘。お幾いくという二十四五の凄こわい女でした。

お幾とお袖は本当の姉妹、父親の黒雲の弥十郎は、せめてお袖だけでも、真人間にするつもりで、堅気かたぎの商人に育てさせ、蔭かげながらその生長を見張っておりましたが、父弥十郎が十年前に刑死して、姉のお幾も若過ぎて妹を救う手が及ばず、お袖は見す見す芸子に売られました、その後も二人の間にひそかに文通がつづき、世間並の姉妹以上の親しい心持で生長したのでした。

お幾お袖の母——黒雲弥十郎の女房——は、富崎家に奉公して、佐太郎の乳母うばを勤めたことがあり、弥十郎も幾度か富崎左仲に助けられて、恩の上にも恩を重ね、富崎家万一の場合には、命を投出して——と弥十郎お幾父娘は誓ちかっていたのです。

測はからずも金森家の鉄砲売込のことから、恩人の富崎左仲が切腹し、伴の佐太郎は三千両を償つくなう由もなく、恥を忍んで主家を退転したと、——妹のお袖から聞いた姉のお幾は、昔の仲間を語らつて釜屋に忍び込み、お袖とよく似た顔容を利用して、金の番をしている伊八を殺しました。

小僧の乙松おとまつが、宵暗はなれの離屋の入口で見たのは、お袖ではなくて、この姉のお幾だったことは言うまでもありません。

さて、離屋へ忍び込んだお幾は、明日は公儀に没収ぼつしゅうされる三千

両だけ持出して、富崎佐太郎のために、父親の罪の償いつぐなにするつもりでした。しかし八千両の小判を目の前に見ると、ツイ昔くせの癖くせが出て八千両そっくり持出してしまい、そのうち三千両を、さっそく佐太郎の名で金森家に返し、残る五千両を仲間の者に頒わけてやったのでした。

お袖は一切のことを姉のお幾の仕事と知り、翌る日の朝早々、離屋の雨戸を外から締め、庭の潜戸くぐりを閉ざして出来るだけ証拠を隠しました。

それはせめても、妹のお袖に出来る、精いっぱいのことだったのです。

お袖が縛られ、富崎佐太郎も八丁堀へ引かれたと聞いて、お幾がたまらなくなつて自訴したのは、まさに平次の思つぼう壺つぼでした。お袖を出来るだけ痛々しく扱わせて、江戸中の評判になるようにするためには、頑固がんこで一国こくな滝五郎に、お袖を下手人と思ひ込ませる外はなかつたのでしよう。

これは銭形平次一生に一度の意地の悪い詭計きけいでした。

お幾は処刑され、お袖と初太郎は無事に小田原に落ち、富崎佐太郎は金森家に帰参しました。

しかし、後年金森家が取潰とりつぶされたのは、こんなつまらない事が幾つも幾つも重つて、公儀の心証を悪くしたこともその原因の一つだったのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「文藝讀物」昭和十九年四月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部